



ぷらっとシネマ レバノン 予想外の希望の系譜『
灼熱の魂』（D・ヴィルヌーブ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15431



レバノン ― 予想外の希望の系譜 灼熱の魂 (D・ヴィルヌーヴ監督)

亡くなった母ナワルが弁護士に託した遺言に、ジャンヌとシモンは驚いた。双生児の姉弟である2人に母が残したのは、謎めいた2通の手紙だった。カナダで育った2人の、会ったことのない父と、存在も知らなかった兄に宛てた手紙。その2通を届けてほしいという母の遺志に戸惑いながら、2人は故国レバノンに向かう。

少ない手がかりのなかから、レバノン時代の母が獄中にいたことを2人は知る。まだ20代だったナワルが生きた1970年代のレバノンは、1990年まで続く内戦へと崩落が始まる時代だ。ヨルダンによるPLO追放、パレスチナ難民の流入、キリスト教マロン派とイスラム教ドゥルーズ派の対立の激化。それらの出来事のひとつひとつが、ナワルの人生を荒々しく変えていった。パレスチナ人との許されない恋、ひっそりと産んだ赤ん坊、子どもとの別離。ジャンヌとシモンの兄にあたる、その子はどうなったのか。カナダからの旅人でしかない姉弟には、敵か味方かの判別も難しい。それでも、レバノンで魂を燃やして生きた若き日の母の人生が少しずつ見えてくる。

その後の母は政治運動に関わり、指導者暗殺を企てたかどで投獄されたとわかる。そしてジャンヌとシモンは、母が生前に語らなかった、自分たちの出生の秘密にも向き合うことになる。2人は、獄中で生まれた。レバノンにも中東にも絆を感じていなかった2人が、母の人生の旅路をたどることで初めて、なぜ自分たちがレバノンを出てカナダにいるのかも知る。ぜひとも母の手紙を父と兄に届けたい。そう思うようになる2人が最後に知る、遺言の意味は何か。

W・ムアワッド原作の舞台劇からの映画化だ。映像となった本作で胸つかれる思いがするのは、内戦の傷がいまも癒えていないことの描写ではないだろうか。爆撃されたままに放りだされた街々の荒廃、瓦礫のなかに住まう人々の目に宿る疑心、親族を引き裂いて消えない憎しみ、四分五裂の社会に溢れる恐怖と不安。監督は本作の最後で、そうした困難の克服に向けた希望の光も用意している。ただし、中東の現今の状況においては、その光は、いわば祈りのようなものでしかないのだが。

本誌の評論を書くにあたって、いつもなら私は英語サイトでプロの評論家が英米の新聞に書いた

映評を50本から200本ほど読む。しかし今回はそれをせず、日本の雑誌に掲載された重信メイの映評だけを読んだ(『pen』2011年12月号)。1970年代から90年代の中東で、未来をつくりだそうと闘ったナワルのドラマについて、重信が書いているなら、それ以外の評者に関心は向かなかった。

原作は、実際に起きたいくつもの出来事を下敷きにしている。重信の指摘によれば、たとえば、ナワルが孤児院を訪ねた折に遭遇するバス乗客虐殺は、内戦の契機となった1975年の事件だ。また投獄と拷問というナワルの経験は、1988年にキリスト教武装勢力の指導者暗殺を試みたスハ・ブシャーラの自伝をもとにしているという。現実の事件をつないでつくったために、一人の女性の物語としては、たしかに少々無理な偶然を演出したきらいはある。衝撃的な結末についても、詳細をここに書くことは控えるが、時間的なつじつまが合わないように思う。しかし、そんな小さな矛盾はどうでもよい。そう思えるのは、長期内戦の惨禍と今日にまで続く苦しみの描写に真実味があるからだ。重信もその点を評価している。

重信の映評を読みながら、その母、重信房子がパレスチナに向かった1971年からの40年を思った。PFLP(パレスチナ解放人民戦線)と共闘し、日本赤軍を創設して、レバノンを拠点に活動した。革命家としてのその行動には、多くの不法性と過ちが含まれていたのはまちがいない。それでも、1971年に世界革命の拠点形成を志して、パレスチナ解放の課題に共闘するとした選択そのものの意義と価値は失われぬ。ナワルと同世代の重信は、同じ時代、同じレバノンの地で、公正な世界への希望を抱いて革命を模索していた。日本赤軍はすでに解散を宣言して久しく、重信が模索した革命は模索に終わったと言うべきだろう。

しかし希望は、ときとして予想外のかたちで引き継がれることがある。1973年にペイルート(レバノン)で生まれたメイが、いま日本国籍を取得して日本に在住し、日本語で『灼熱の魂』を評論しているのを見ると、ドラマチックな希望の系譜を感じる。日本赤軍をただ「テロ集団」と断ずる視点からは、熱い魂で屈せず生きたナワルの遺言の意味も見えないだろう。

(カナダ、フランス、2010年、131分)